生産者通信
NPO法人
米ニケーションセンター
定価　100円（送料込）

新潟県山田錦協議会 播種前研修開催

明るい未来農業の戦略

山形大学の藤井弘志教授による特別講演に聞き入る

今年度の初回となる研修では、昨年から取り組んでいるドローンを活用した「リモートセンシング」の指導と分析を担当されている山形大学農学部の藤井教授の特別講演を拝聴しました。

藤井教授は農業改良普及員の経験もあり、難しい用語は使わずわかりやすく、生産者にとって耳の痛い話もズバリ話されました。

最初に先生から「無から有を生み出す農地は『国の宝』です」との信念で「電気・水・ガス・交通・通信は人間社会のライフラインです。同じように水田も人間社会のライフラインです。今、それが失われようとしています」。みず穂の国への畏敬と危機感を話されました。

そして「稲作の実態を知り、変化を知る。近未来の農業を考え必要な準備をする」ために最先端の農業技術を研究し次代に備えています。

〇思わず「ドキ！」

『「俺は有機栽培している」という生産者に４つの質問をすると答えられない。』ほとんどの生産者が有機肥料を使用しても実態はわからないのではないかとの問いに参加者は思わず苦笑い。自分の田圃に施している肥料が実はよくわかっていない現実をズバリ指摘。

〇稲作の現状と変化

気温の変化を指摘。白未熟粒発生の原因は約30年間で全国平均2℃上昇し夜間の最低気温が上昇しているので呼吸量が増加していることが原因。新潟県でも気温上昇は同じで、近年の新潟県の一等比率がやや低いことは無関係ではない。白未熟発生助長している要因は、食味重視の肥培管理。窒素量を控えることで生育後半に窒素栄養不足に陥る。特に基部未熟、背白粒の発生は、低窒素条件だと低い温度域でも発生する。

台風、フェーン等によるストレス。そして地力の低下。作土層の浅層化、有機物施用量減少、ケイ酸資材施用量の減少、邊土の減少などの要因が複雑に絡み合っている。

～次号へ続く～

環境保全型農業の確認（言葉だけの・・・）

「質問」

①あなたの水田に堆肥を施用していますか？
②施用した堆肥の畜種は何ですか（牛、豚）？
③堆肥の施用量は、10アールどのくらいですか？
④施用した堆肥成分濃度は知っていますか？

「失敗事例」

- M町（農家に施用量を聞いたところ10アール当たり1トン、稲の生育が過剰で倒伏した。Why?）
- S市（畜種は分からないが毎年、10アール当たり1トン、稲の生育が過剰で倒伏した。Why?）

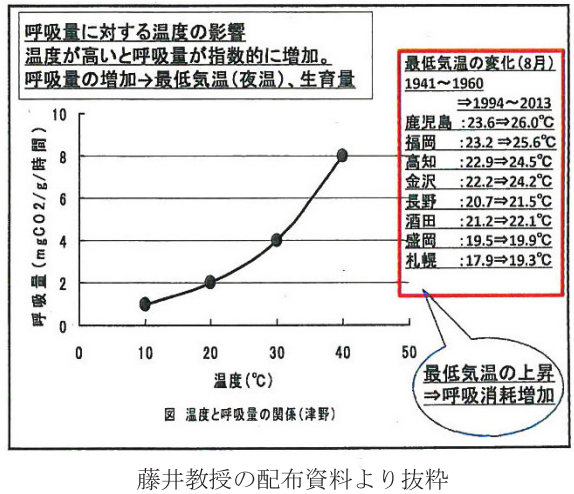

図　温度と呼吸量の関係（津野）

藤井教授の配布資料より抜粋